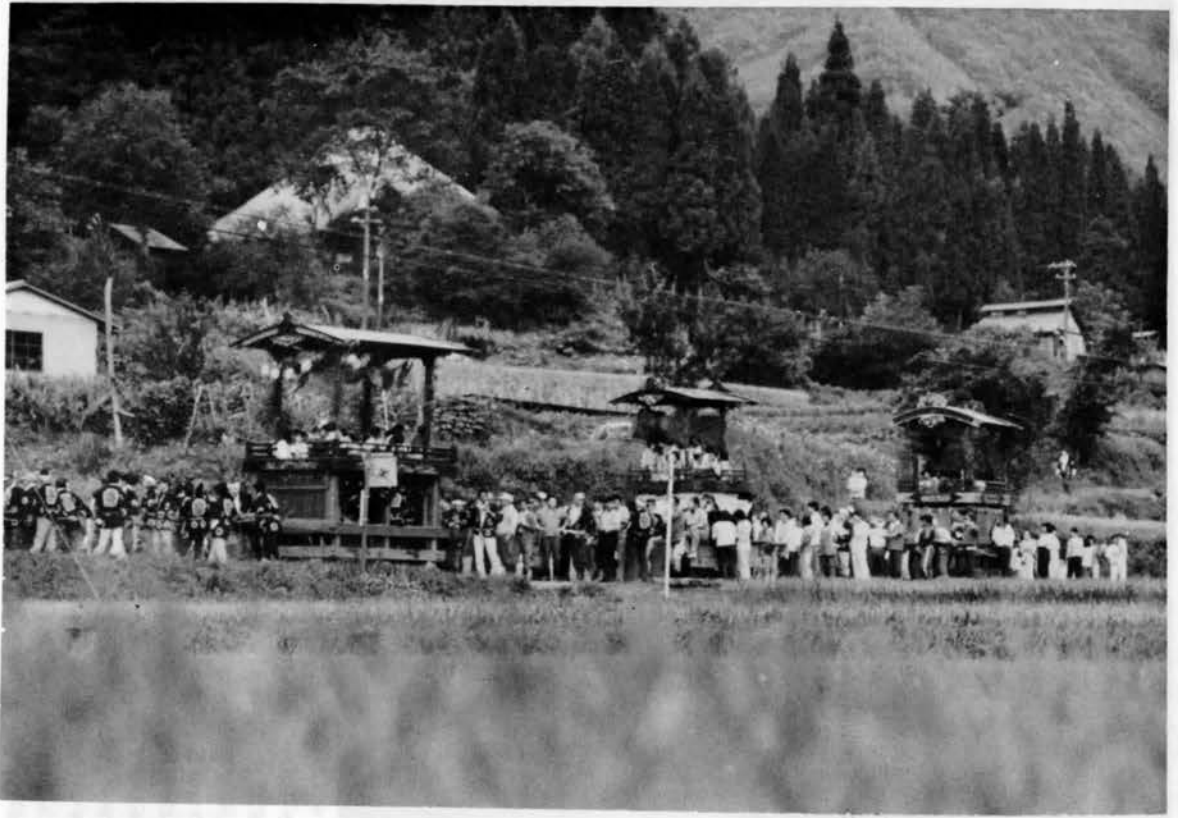


山と博物館

第22巻 第9号

1977年9月25日

大町山岳博物館



秋祭り (大町市海ノ口)

撮影 西沢 要

クマと私

クマと聞けば一般的にはどう猛で人畜に危害を与えるものと思われがちですが、突然に会ったり、親子連れであった場合の他は、ツキノワグマはいたって臆病者で、あの大きな鼻で人の気配を察し、いち早く姿をかくします。

私は狩猟をはじめ41年になります。その間にはいろ／＼な事がありました。

或る秋の夕方、毎日本の実を食いにくと聞いて、現地の手頃な木に登り銃を片手に目を遠くに配り、今に現われるかと見張っているうちに何か妙な音がするので、ひよつと下を見ると、なんと自分の登っている木に20kg位の子グマが登ってくるではありませんか。

一瞬冷たいものが背筋を流れ、仰天しつつも夢中で銃を向け片手撃で引金を引きました。クマは逃げ去りましたが、私は恐怖で足がすくみ木からおりられずふるえていた事をおぼえています。

また、これは私が撃ったものではありませんが、松川村で3年ほど前3本足のものが獲れ(3P写真参照)驚いたことがあります。

昔は山の奥に入らなければ姿が見られなかったのに、近頃はよく人里に出没し農作物を食い荒したり、養蜂を襲ったといとも簡単に殺されるので昔より数が増えたのではないかと思います。

しかし、これは大きな間違いで、実際はクマの生息する奥地まで開発が進み、安住の地も大切な食糧である木のなる木も伐採され、住むに住めず、食うに食えず、生きるがために里近くまで現われるものと思います。

ここで45年からの大北地方での捕獲数をみると、45年76頭、46年64頭、47年20頭、48年18頭、49年27頭、50年23頭、51年22頭と非常に少なくなってきたおり、絶滅前は何んどかなければ、私は数年前より危害を及ぼさない子グマについては、捕獲をしないように狩猟者に呼びかけております。

(大北猟友会長 北沢繁美)

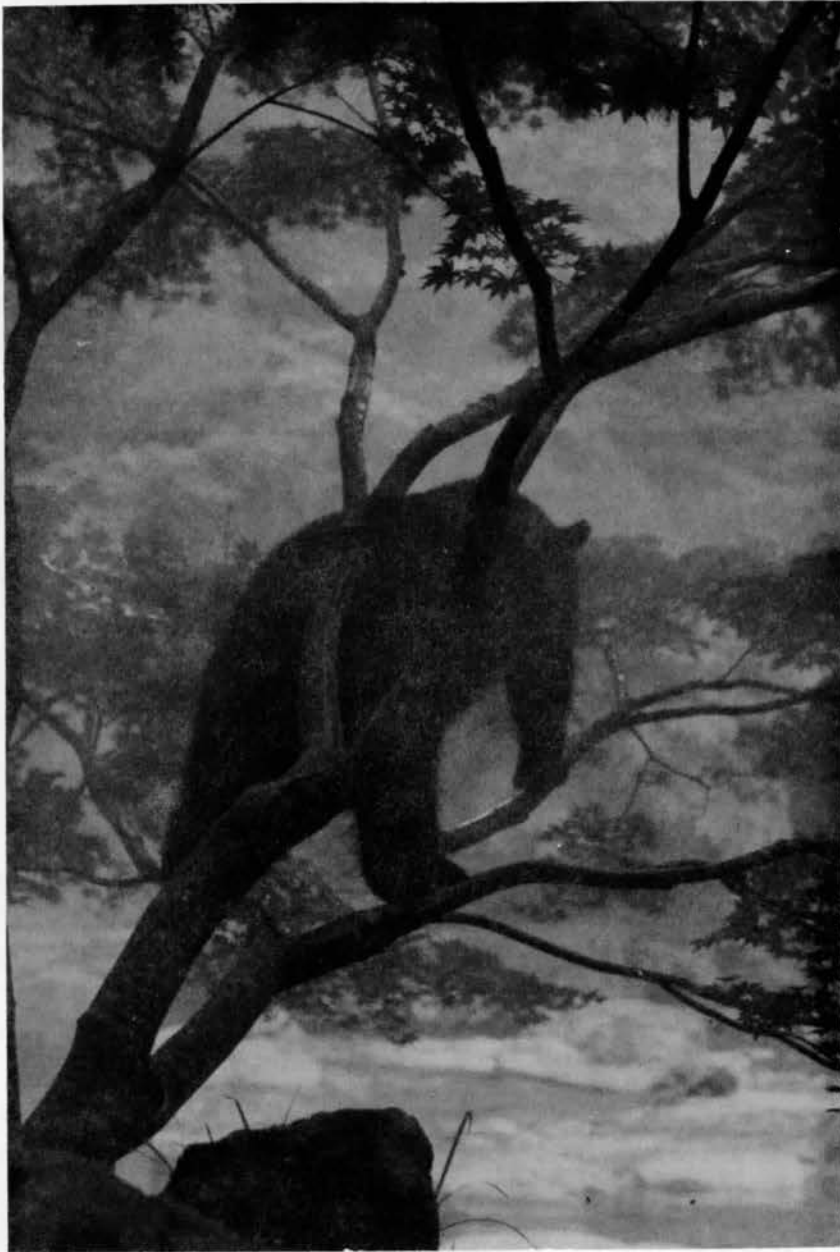
ツキノワグマの研究

渡辺弘之

かなりよく登山をしている人でも、クマに会ったことのある人は少ない。クマに会うことは幸運な出来事なのである。実際、クマのいるはずの山の中を一日中歩きまわってみて

も、足跡が一つみつかるか、糞が一つ拾えれば大収穫、クマの存在を認める何らの証拠も得られないこともしばしばである。ひとめみることにさえ困難なものの、がんばってみても

データの集積は進まない。研究者が少ししか現れないのは当然ともいえよう。それだけにツキノワグマの生態、ツキノワグマの生活はよくわかっていない。まだまだ熊師の信じられないようなクマの話がまかり通っている。もちろん、われわれ数少ない研究者よりも、クマをより身近で観察されていることは確か、多くの貴重な知識を持っておられるはずである。それを公にし、科学的に事実かどうかを証明してほしいものである。



木に登ったクマ

私のツキノワグマ研究もツキノワグマによる森林被害、すなわち、ツキノワグマがスギ・ヒノキ・カラマツ・ウラジロモミなどの有用針葉樹の樹皮を剥ぎ、形成層をかじる、いわゆる「クマハギ」を何とか防止する方法はないかということから始まった。

このツキノワグマが針葉樹の樹皮を剥ぎ、林木に重大な損害を与えるという習性、おもしろい習性は北海道に分布するヒグマには全くみられないのに、全く別種のアメリカクマにこの針葉樹の樹皮を剥ぐという共通の習性のあることがわかった。ツキノワグマによる「クマハギ」の害に、アメリカにおけるアメリカクマの研究が大いに参考になるのである。

今春(一九七七年)二月、アメリカ・モンタナ州のカリスベルで開かれた第四回クマの研究および管理についての国際会議に、ツキノワグマによるクマハギを報告し、アメリカクマによるクマハギについての研究を知り被害地をみとめるため参加してきたが、ツキノワグマの研究はあのように猛さと巨大で知られるハイイログマ(グリズリー)やコディアックヒグマより、ずっとむづかしいことがわかった。

ハイイログマやコディアックヒグマを観察することはずつとたやすいらしく、私達は野生のツキノワグマの写真一枚ですることができなかったのに、写しだされるスライドには時には何頭ものクマが写っているのである。もちろん、クマ研究に大きな努力をはらっていること、多くの研究者の存在することは大きな刺激であった。

会議で驚いたことを少しあげてみると、ネシー大学の大学院生がグレート・スモーキーマウンテンでアメリカクマの食性研究をしているが、それには七五の胃内容物と一〇二五の糞を検査していた。これだけ調べればより正確な食性、その季節的变化、さらには行動についても多くの考察ができるであらう

う。ツキノワグマで一地域でこれだけの糞を集めることはたいへんなことであるのに、それが集められる容易さにびっくりした。

テレメーターあるいはその他の機器類の使用はやはり盛んである。わが国でやっと二回それもきわめて短期間で終わってしまったテレメーターをペンシルバニアではアメリカクロクマ二七頭につけ、二、八二五地点を確認したとか、アリゾナでは二八頭につけ、一、一〇〇地点を確認し、その多くのは冬ごもり穴まで追跡できた、あるいは、アラスカのハイイログマでも四〇頭にはマーク、一二頭にはテレメーターをつけて放逐し、オスは七〇二平方キロ、メスは三一九平方キロのホームレンジを持つとか、規模の大きな研究の報告がつけられた。

テレメーター以外にもワイオミングではタイムラプスカメラを用いて、三六のカメラサイトで五五日モニターし、三二頭のグリズリーやアメリカクロクマを記録したとか、い

ろいろな工夫をしているし、人工衛星とコンピュータを利用しての植生の区分とクマの分布域を推定するなど巾の広い手段を考えていた。

クマの分布域、個体数、年令構成、行動圏(ホームレンジ)、繁殖、食べもの、冬ごもりの生理、いろんなことがわからなければクマの保護も管理も十分には機能しない。いろんなことがわかってから管理について討議でき、その方法を具体的に考えてみれるのである。

そんなたくさんの糞の集められる地域のあること、それだけたくさんのクマが次々と捕獲できテレメーターをつけて放逐できる森林のあることはうらやましかつた。何頭ものクマにテレメーターをつけて放逐など、日本ならどこで許してくれるだろう。

クマの研究者はアメリカだけでも二〇〇人以上もいるらしく、若い女性の研究発表もあった。その所属も大学関係者が多いものの、



クマハギの跡

北安・松川村で捕獲された3本足のクマ
大町市 北沢繁美氏蔵

国立公園所属の研究者、フィッシュ・ゲーム・ディパートメント、ワイルドライフ・サービス、国有林の研究者、林業試験場など、さまざままで、それも共同研究が多い。日本ではまだとてもこんな多彩な組合せを実現できそうもない。

アメリカでの研究者の多いこと、クマが多くて研究しやすいこと、機械力が駆使できることをうらやましがつても、ニホンツキノワグマ、エゾヒグマの生態を調べてもらえなければではない。われわれでやらなければならぬし、それはぜひ、われわれの手で少しずつでも明らかにしたいものである。

目下、アメリカではパーク・サービスの援助でヒグマとアメリカクロクマの文献目録をコンピュータに記録し、著者や項目をたちどころに教えてくれるシステムをつくっており次の段階はメガネグマ、マレーグマ、ツキノワグマなど全世界のクマに広げるつもりだといふ。

ツキノワグマについての研究報告はまだ少なく、わかっていないことが多い。しかし、小さな貴重な観察はたくさんあるはずだ。たった一つの糞の内容物の観察、たった一つの冬ごもり穴の形態、たった一つの記録では意味は小さいが、みんながだしあえば、すぐ

に一〇例にも、一〇の記録にもなる。そんな記録を大切にしたいもの、だしあいたいものである。

そして、共同研究を進めたい。冬ごもり穴あるいは、あたり・かがり・円座といったツキノワグマの習性・行動の解析には、まずハンターの協力と知識の提供をお願いしたい。それにも増して、現在一年間に、狩猟と有害獣駆除によって捕殺される二、〇〇〇頭以上にも及ぶ、ツキノワグマについて、性別、体重、年令、胃内容物、妊娠の様子などの情報データがほしい。これらのほとんどはやみからやみ、その性別も体重も年令も、わずかに捕獲数一という数字のみを残して消え去ってしまう。いや、捕獲数一という数字さえ不明確のままなのである。

この捕獲個体の解析から、年令構成の変化や繁殖状況についての知識を得ることができそのデータは二、〇〇〇頭について得られる。その知識はクマの保護や管理についての方法を示してくれるはずなのである。小さな観察をだしあひ、こつこつと観察をつづける努力と同時に、法的な強制力と組織を活用する時にきているようだ。

(京都大学農学部講師 農学博士)

鴨たちの駆込寺としての湖

—禁猟区としての木崎湖のもつ意義—

三石 紘

木崎湖を校区内に持つ大町市立第一中学校の生物クラブは、伝統的にこの湖沼の生物相の研究を続けている。「生態系」とか「食物連鎖」などの生態学的概念の实地研究の場として、また身近な郷土の自然を知るフィールドとして仁科三湖は最適だからだ。私も十年ほど前、クラブ員と一緒に三年間この湖に通った。水禽、特に鴨類の分布や生態をテーマにした時期だった。

北アルプスの新雪が湖面に映る。寒風がヤツケを通して膚にしみる。双眼鏡を握る手がこごえた。プロミナー(二十倍の望遠鏡)の視野に鴨たちが躍動した。マガモの雄の青首が陽を受けて光る。カルガモが鳴く。けれど



冬の木崎湖、水鳥やワカサギツリで賑う 撮影 西沢 要

遠方だから嘴だけが動く。キンクロハジロが浮上する。カイツブリの顔のなんととほけていることか……私たちは寒さも忘れて、鴨たちの楽園で日没まですごしたものだ。

大町を離れてから今日まで、やはり初冬の木崎湖に通っている。ちゃんと私の探鳥スケジュールに組み込まれてしまっているのだ。一昨年の十一月二十八日、黒沢高原で定例のバードセンサス(鳥の個体数調査)をやった帰り、木崎湖に立ち寄り、鴨を数えた記録がある。マガモ250羽、カルガモ100羽、コガモ40羽、キンクロハジロ20羽、カイツブリ20羽、ホシハジロ15羽、そしてマガモの群れの中にオナガガモとオシドリが数羽混っていた。約一時間の観察、それも数取器で10羽位をひと

まとめにしてガチャガチャやったラフな記録であるが、ここ近年の木崎湖の鴨の状況を現わしているはずである。カイツブリを入れて常連が六種、約三千羽が白昼の湖面に憩っているのである。

ところで、木崎湖はずっと以前からこのように鴨たちの楽園だったのだろうか。信州大学教授羽田健三先生は大町出身、大町山岳博物館の生みの親であるが、木崎湖をはじめとする湖沼の鴨の研究者としても、数々の業績をあげておられる。最近刊行になった県林務部発行の「長野県の野鳥」で「冬の内水面の水禽類」を報告されているが、そこで報せられていることを参考に昔の木崎と今日のを比較してみよう。

羽田先生は、昭和二十四年から二十七年にかけて、木崎湖を二十二回調査した。そして水禽の総数に注目すると、最低が16羽(昭和二十四年十月十九日、マガモ1羽、カルガモ

4羽、キンクロハジロ7羽、カイツブリ4羽)、最高が200羽(昭和二十六年三月十七日、マガモ45羽、カルガモ100羽、ホシハジロ6羽、アカエリカイツブリ48羽、ユリカモメ1羽)である。つまり約三十年前(もちろん禁猟区ではなかった)には年に多くて二百羽程度だった。ところが禁猟区になってからは増しつづけ、前述したように三千羽前後の水禽が常にシーズンになると滞在するように変わったのだ。

ところで木崎湖以外の湖の状況はどうなのだろう。再び羽田先生のデータでみてみよう。昭和四十六年から四十七年の冬期、十二回の調査をしているが最大羽数は十二月三十日に5075羽である。この時期に他の大湖沼や河川

の状況はどうか。諏訪湖が同じ日で355羽、野尻湖が同年十二月二十九日になった12羽、そして隣りの青木湖は同じ日にゼロ羽である。そして千曲川の中流域の数は十月二十九日に2900羽だったものが十二月二十日には382羽に減っている。

諏訪湖、野尻湖、それに千曲川の流域も禁猟区ではない。だから猟期になると鴨たちは安心して休憩などできない。そこで猟の禁止されている木崎湖に集結する。「駆込寺」と呼ばれる寺がある。窮地におちいった人々が最後に救いを求める場だ。年々向上する銃器と狩猟人口、そして鴨たちの休憩の場である湖沼や水系は埋立つてや護岸工事という名でど

しどし狭められつた。先に引用したデータは、木崎湖が鴨たちの最後の駆込寺であることを物語っている。

近年、日本とソ連との間に「渡り鳥条約」が締結され、国の施策としても渡り鳥の保護は優先されなければならないはずである。ところが、シベリアで繁殖して日本に冬をすごし

にやってくる鴨たちの多くは銃の犠牲の悲運に遭う。「駆込寺」があまりに少ないのだ。そして最後の駆込寺である木崎湖がまた、禁猟区の更新か解除かの瀬戸端に立されて

いる。イネの食害やふみ荒しという解除理由についても、もっと詳しい調査が必要ではないかと思う。というのは木崎に鴨が渡ってくるのはイネの刈り入れ後なのだ。私も十年前三年間木崎に通ったが、稲穂がたわわな頃、鴨の群れているのを見たことがない。かといって害されるという地元の方々のアピールを無視してはならない。人も鳥も安心してすめる郷土こそ我々の理想であり、努力すべき目標なのだ。十月一日にせまった禁猟区更新か解除かの結論は、まず調査をして、原因と被害などを明確にしてからだしてもらいたいものだ。

この六月、シベリアに探鳥にでかけた。日本ではみられない繁殖期の鴨たちに接してきた。バイカル湖上を飛ぶつがいハクチョウをみながら、これらの鴨やハクチョウが冬の信州の湖面に憩うのだな、と感傷的になった。今年の冬も木崎湖でシベリアの鴨たちと再会したいものだ。鴨たちの最後の駆込寺、木崎湖の禁猟区解除については慎重に考えていただきたいものだ。(長野市立堀花中学校教諭)

「寄付ありがとうございました」

- 山と博物館 協力費
- 五〇〇〇円 大町市大字社四〇九二
- 五〇〇〇円 五十嵐 水卯 殿
- 一〇〇〇〇円 東京都新宿区四ツ谷谷住町
- ライチヨウ寄付金 一九 鈴木 貞三 殿
- 五〇〇〇円 東京都練馬区貫井3-45-8
- 岡村 正子 殿

山と博物館 第22巻 第9号
 発行所 長野県大町市T.E.M.2-0211
 印刷所 大町市 大町山岳博物館
 印刷所 大町市 大親タイムス印刷部
 定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)
 郵便振替口座番号 長野二二二九三